
[井戸・カラス・銃] 井の中の蛙、大海を知らず

AKIRA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「井戸・カラス・銃」 井の中の蛙、大海を知らず

【Nコード】

N6170P

【作者名】

A K I R A

【あらすじ】

ルーズリーフ十五行分に書き綴った三題嚢です。

井の中の蛙。私を人間の言葉で表すと、この言葉になるらしい。随分と昔、友達のカラスが教えてくれた。意味までは知らない。知ろうとも思わない。

生まれた時から居た、この狭い筒ののびる先に、ぼつかりと空いた穴からぼんやりと空を見つめる。そのまま湿った床に倒れ込むと、自分の手が何かに触れてカシャンと音をたてた。13発入りの”銃”と呼ばれる物だ。一年程前までは、コレと毎晩何処かの誰かが捨てにくる”銃弾”を使って、鳥を殺して空腹を満たしていたが、コレが壊れてしまつてからは、この地方では滅多に降らない雨水で生きてきた。自分でもよく生きられたものだと思う。しかし、それもそろそろ限界が近づいてきた。もうすぐ死ぬんだなと直感的に思った。”お腹空いた”とは思わない。そもそも、どれが空腹の感情なのかいまいち良く分からない。ぼつかり空いた穴から見える空はどれだけ梯子を上つても届かない遠くの世界の様に感じた。空しい。とは、まさにこのことを言うのではないか。それなら、こんな感情は捨ててしまつて構わない。この狭い湿った筒の中が私の世界の全てであり、私の全て。守った物は何もない。守るべき物もない。願う必要もない。

”井の中の蛙大海を知らず”。最期に思い出したのが何故この言葉だったのか。それは私にも、よく分からない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6170p/>

[井戸・カラス・銃] 井の中の蛙、大海を知らず

2010年12月23日20時52分発行